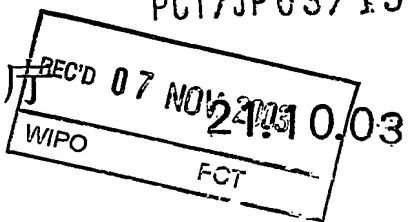


Rec'd PCT/PTO 5 Feb 2005 10/52564 PCT/JP03/13435

日本国特許
JAPAN PATENT OFFICE



別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出願年月日
Date of Application: 2002年10月21日

出願番号
Application Number: 特願2002-305712

[ST. 10/C]: [JP2002-305712]

出願人
Applicant(s): ポリプラスチックス株式会社

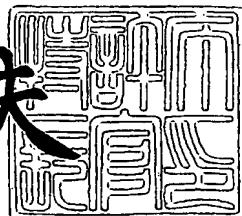
BEST AVAILABLE COPY

PRIORITY
DOCUMENT
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN
COMPLIANCE WITH RULE 17.1 (a) OR (b)

2003年9月16日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

今井康夫



出証番号 出証特2003-3076001

【書類名】 特許願
【整理番号】 102PP014
【提出日】 平成14年10月21日
【あて先】 特許庁長官 殿
【発明者】
【住所又は居所】 静岡県富士市宮島973番地 ポリプラスチックス株式会社内
【氏名】 中根 敏雄
【発明者】
【住所又は居所】 静岡県富士市宮島973番地 ポリプラスチックス株式会社内
【氏名】 横田 俊明
【発明者】
【住所又は居所】 静岡県富士市宮島973番地 ポリプラスチックス株式会社内
【氏名】 坂本 勝利
【発明者】
【住所又は居所】 静岡県富士市宮島973番地 ポリプラスチックス株式会社内
【氏名】 塩飽 敏雄
【特許出願人】
【識別番号】 390006323
【氏名又は名称】 ポリプラスチックス株式会社
【代理人】
【識別番号】 100063897
【弁理士】
【氏名又は名称】 古谷 韶
【電話番号】 03(3663)7808

【選任した代理人】**【識別番号】** 100076680**【弁理士】****【氏名又は名称】** 溝部 孝彦**【選任した代理人】****【識別番号】** 100087642**【弁理士】****【氏名又は名称】** 古谷 聰**【選任した代理人】****【識別番号】** 100091845**【弁理士】****【氏名又は名称】** 持田 信二**【選任した代理人】****【識別番号】** 100098408**【弁理士】****【氏名又は名称】** 義経 和昌**【手数料の表示】****【予納台帳番号】** 010685**【納付金額】** 21,000円**【提出物件の目録】****【物件名】** 明細書 1**【物件名】** 要約書 1**【プルーフの要否】** 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 非晶質全芳香族ポリエステルアミド

【特許請求の範囲】

【請求項 1】

- (A) 4-ヒドロキシ安息香酸
- (B) 2-ヒドロキシー-6-ナフトエ酸
- (C) 芳香族アミノフェノール
- (D) 芳香族ジカルボン酸

を共重合させて得られる全芳香族ポリエステルアミドであって、

- (1) (C) 芳香族アミノフェノールの割合が7～35モル%、
- (2) 原料モノマー中の屈曲性モノマーの割合が7～35モル%、
- (3) (A) 4-ヒドロキシ安息香酸と(B) 2-ヒドロキシー-6-ナフトエ酸との比率 ((A) / (B)) が0.15～4.0 であり、
- (4) 20°C/min の昇温速度によるDSC測定で融点が観測されず、
- (5) ガラス転移温度が100～180°C

であることを特徴とする軟化流動時に光学的異方性を示す非晶質全芳香族ポリエステルアミド。

【請求項 2】

- (D) 芳香族ジカルボン酸中、イソフタル酸の割合が35モル%以上である請求項1記載の非晶質全芳香族ポリエステルアミド。

【請求項 3】

屈曲性モノマーが、1,3-フェニレン骨格、2,3-フェニレン骨格及び2,3-ナフタレン骨格を有するものから選ばれる1種又は2種以上のモノマーである請求項1記載の非晶質全芳香族ポリエステルアミド。

【請求項 4】

屈曲性モノマーが、イソフタル酸、フタル酸、2,3-ナフタレンジカルボン酸、m-アミノフェノールおよびこれらの誘導体から選ばれる1種又は2種以上のモノマーである請求項1記載の非晶質全芳香族ポリエステルアミド。

【請求項 5】

屈曲性モノマーが、イソフタル酸である請求項1記載の非晶質全芳香族ポリエステルアミド。

【請求項6】

(C) 芳香族アミノフェノールが、p-アミノフェノールである請求項1～5の何れか1項記載の非晶質全芳香族ポリエステルアミド。

【請求項7】 請求項1～6の何れか1項記載の非晶質全芳香族ポリエステルアミドから形成される繊維。

【請求項8】 請求項1～6の何れか1項記載の非晶質全芳香族ポリエステルアミドから形成されるフィルムもしくはシート。

【請求項9】 請求項1～6の何れか1項記載の非晶質全芳香族ポリエステルアミドと他のポリマーとから形成される多層フィルムもしくは多層シート。

【請求項10】 他のポリマーがポリオレフィンである請求項9記載の多層フィルムもしくは多層シート。

【請求項11】 請求項1～6の何れか1項記載の非晶質全芳香族ポリエステルアミドから形成されるプロー成形品。

【請求項12】 請求項1～6の何れか1項記載の非晶質全芳香族ポリエステルアミドと他のポリマーとから形成される多層プロー成形品。

【請求項13】 他のポリマーがポリオレフィンである請求項12記載の多層プロー成形品。

【請求項14】 ポリオレフィンが高密度ポリエチレンである請求項13記載の多層プロー成形品。

【請求項15】 プロー成形品が燃料タンクである請求項11～14の何れか1項記載のプロー成形品。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、プロー成形品等に好適に用いられる非晶質全芳香族ポリエステルアミドに関する。更に詳しくは、優れた延伸性を持ち、且つ異種ポリマーとの接着性に優れていることから、多層フィルムもしくは多層シート、多層プロー成形品

等に特に好適に用いられる非晶質全芳香族ポリエスチルアミドに関するものである。

【0002】

【従来の技術及び発明が解決しようとする課題】

液晶性ポリマーは、優れた流動性、機械強度、耐熱性、耐薬品性、電気的性質をバランス良く有するため、高機能エンジニアリングプラスチックスとして好適に広く利用されているが、その大部分は専ら射出成形により得られるものであった。

【0003】

一方、近年の著しい産業の発展に伴い、かかる液晶性ポリマーの用途も多岐にわたり一層高度化、特殊化する傾向にあり、液晶性ポリマーの耐気体透過性を活かし、プロー成形及び溶融延伸加工等により効率良く経済的に成形加工してその優れた物性を保持した中空成形品、フィルムもしくはシート、繊維等を得ることが期待されてきている。例えば、自動車部品においても、燃料タンクや各種配管類には、ガソリン透過性が低いことが求められ、しかも高度の機械物性等も要求されるため、従来は専ら金属製のものが用いられてきた分野であるが、軽量化、防錆化、加工コスト低減等のためにプラスチック製部品に代替されつつあり、これらを上記の如き優れた特性を有する液晶性ポリマーのプロー成形により得ることが望まれている。

【0004】

しかしながら、液晶性ポリマーは、流動性、機械物性に優れている反面、一般にプロー成形法を適用する上で最も重要とされる特性である溶融状態での粘度や張力が低いため、プロー成形法により所望の形状の成形品を得ることは至難である。この改良法として、固有粘度の高い高重合度ポリエスチル樹脂を用いる方法、分岐を有するポリエスチル樹脂を用いる方法、更に各種フィラーを添加する方法等が考えられているが、いずれも改良効果は少なく、これらの加工法に対する材料として不充分である。

【0005】

一方、プロー成形性等を改善する目的で、アミノ化合物を共重合させた液晶性

ポリエステルアミドが各種提案されている（特許文献1、特許文献2、特許文献3、特許文献4、特許文献5）。ところが、本発明者の追試によると、これら従来提案されている液晶性ポリエステルアミドは、ある程度優れた物性を示し、繊維、ブロー成形品等に利用可能ではあるが、延伸性が不充分な場合があり、また異種ポリマーとの接着性に劣るため、特に多層フィルムもしくは多層シート、多層ブロー成形品等には実質的に利用することができないという欠点があった。

【0006】

【特許文献1】

特開昭57-177019号公報

【特許文献2】

特開昭61-239013号公報

【特許文献3】

特開昭63-191824号公報

【特許文献4】

特開平5-170902号公報

【特許文献5】

特開2001-200034号公報

【0007】

【課題を解決するための手段】

本発明者らは前記問題点を解決し、良好な機械的物性を維持しつつ、優れた延伸性を持ち、且つ異種ポリマーとの接着性に優れている全芳香族ポリエステルアミドの提供を目的として銳意研究した結果、ポリマー骨格中に原料モノマーとして特定の4種の選択組み合わせ、且つ原料モノマー中に特定量の屈曲性モノマーを導入することが上記目的達成のために有効であることを見出し、本発明を完成するに至った。

【0008】

即ち本発明は、

- (A) 4-ヒドロキシ安息香酸
- (B) 2-ヒドロキシ-6-ナフトエ酸

(C) 芳香族アミノフェノール

(D) 芳香族ジカルボン酸

を共重合させて得られる全芳香族ポリエステルアミドであって、

- (1) (C) 芳香族アミノフェノールの割合が7～35モル%、
- (2) 原料モノマー中の屈曲性モノマーの割合が7～35モル%、
- (3) (A) 4-ヒドロキシ安息香酸と(B) 2-ヒドロキシ-6-ナフトエ酸との比率 ((A) / (B)) が0.15～4.0 であり、
- (4) 20°C/min の昇温速度によるDSC測定で融点が観測されず、
- (5) ガラス転移温度が100～180 °C

であることを特徴とする軟化流動時に光学的異方性を示す非晶質全芳香族ポリエステルアミドである。

【0009】

【発明の実施の形態】

以下に本発明を構成する全芳香族ポリエステルアミドを形成するために必要な原料化合物について順を追って詳しく説明する。

【0010】

本発明に用いる原料モノマーの第1成分は(A) 4-ヒドロキシ安息香酸であり、その誘導体も使用できる。また、第2成分は(B) 2-ヒドロキシ-6-ナフトエ酸であり、その誘導体も使用できる。

【0011】

本発明に用いる原料モノマーの第3成分は(C) 芳香族アミノフェノールであり、p-アミノフェノール、m-アミノフェノール、p-N-メチルアミノフェノール、3-メチル-4-アミノフェノール、2-クロロ-4-アミノフェノールおよびこれらの誘導体が例示される。

【0012】

本発明に用いる原料モノマーの第4成分は(D) 芳香族ジカルボン酸であり、テレフタル酸、イソフタル酸、フタル酸、4, 4'-ジフェニルジカルボン酸、2, 6-ナフタレンジカルボン酸、2, 3-ナフタレンジカルボン酸、メチルテレフタル酸、クロロテレフタル酸およびこれらの誘導体が例示される。

【0013】

上記(A)～(D)成分を共重合させて得られる本発明の全芳香族ポリエステルアミドにおいて、各成分の共重合比率は、本発明所期の目的である、機械的物性を良好に保ちつつ、優れた延伸性、異種ポリマーとの優れた接着性を発現するためには重要である。

【0014】

即ち、本発明の全芳香族ポリエステルアミドにおいて、(C)芳香族アミノフェノールの比率は7～35モル%、好ましくは10～25モル%であることが必要である。7モル%未満では目的とする接着性が発現できず、35モル%より多くなると延伸性が著しく低下するため好ましくない。

【0015】

また、上記原料モノマー中において、屈曲性モノマーの割合が7～35モル%であることが必要である。ここで、屈曲性モノマーとは、フェニレン骨格を有する化合物において、エステル又はアミド形成性官能基（カルボキシル基、フェノール基、アミノ基）の位置がメタ又はオルトである化合物のように、分子鎖を屈曲させるような化合物であって、具体的には1, 3-フェニレン骨格、2, 3-フェニレン骨格及び2, 3-ナフタレン骨格を有するものが挙げられる。

【0016】

より具体的な屈曲性モノマーとしては、イソフタル酸、フタル酸、2, 3-ナフタレンジカルボン酸、m-アミノフェノールおよびこれらの誘導体が例示され、3, 3'-ビフェニルジカルボン酸、4, 3'-ビフェニルジカルボン酸およびこれらの誘導体も屈曲性モノマーとして例示される。特に好ましいものはイソフタル酸である。

【0017】

このことから、本発明の(D)芳香族ジカルボン酸として、全芳香族ジカルボン酸の35モル%以上をイソフタル酸とすることが好ましく、特に全部をイソフタル酸とすることが好ましい。

【0018】

尚、屈曲性モノマーとして、(A)、(B)、(C)、(D)以外のモノマーとして、

m-ヒドロキシ安息香酸、サリチル酸等の芳香族ヒドロキカルボン酸を少量（10モル%以下）導入することもできる。

【0019】

また、(A) 4-ヒドロキシ安息香酸と(B) 2-ヒドロキシ-6-ナフトエ酸との合計は、一般的に30~90モル%（好ましくは50~80モル%）の範囲で用いられるが、(A) と(B) との比率 ((A) / (B)) が0.15~4.0、好ましくは0.25~3であることが必要である。この比率を外れた場合は、結晶質のポリマーとなり、延伸性および接着性が悪くなり好ましくない。

【0020】

本発明の全芳香族ポリエステルアミドにおいて、(A) ~ (D) の最も望ましい共重合比率は、

- (A) 4-ヒドロキシ安息香酸；20~60モル%
- (B) 2-ヒドロキシ-6-ナフトエ酸；20~60モル%
- (C) 芳香族アミノフェノール；10~25モル%
- (D) 芳香族ジカルボン酸；10~25モル%

である。

【0021】

また、本発明の全芳香族ポリエステルアミドは、20°C/min の昇温速度によるDSC測定で融点が観測されない、実質的に非晶質であることが必要である。結晶質ポリマーでは、延伸性、接着性が目的とする値にならず好ましくない。

【0022】

更に、本発明の全芳香族ポリエステルアミドは、ガラス転移温度が100 ~ 180 °Cの範囲にあることが必要である。ガラス転移温度が100 °Cより低いと耐熱性が悪くなり好ましくなく、180 °Cより高いと延伸性、接着性が悪くなり好ましくない。

【0023】

また、本発明のポリエステルアミドには、本発明の目的を阻害しない範囲で少量の公知の他の構成単位（ハイドロキノン、ジヒドロキシビフェニルに代表されるジオール単位）を導入することもできるが、これらの構成単位は事実上含まない。

いことが好ましい。

【0024】

本発明の全芳香族ポリエステルアミドは、直接重合法やエステル交換法を用いて重合され、重合に際しては、溶融重合法、溶液重合法、スラリー重合法等が用いられる。

【0025】

本発明では、重合に際し、重合モノマーに対するアシル化剤や、酸塩化物誘導体として末端を活性化したモノマーを使用できる。アシル化剤としては、無水酢酸等の酸無水物等が挙げられる。

【0026】

これらの重合に際しては種々の触媒の使用が可能であり、代表的なものはジアルキル錫酸化物、ジアリール錫酸化物、二酸化チタン、アルコキシチタンけい酸塩類、チタンアルコラート類、カルボン酸のアルカリ及びアルカリ土類金属塩類、 BF_3 の如きルイス酸塩等が挙げられる。触媒の使用量は一般にはモノマーの全重量に基いて約 0.001乃至 1 重量%、特に約 0.003 至 0.2 重量%が好ましい。

【0027】

また、溶液重合又はスラリー重合を行う場合、溶媒としては流動パラフィン、高耐熱性合成油、不活性鉱物油等が用いられる。

【0028】

反応条件としては、反応温度 200 ~ 380 °C、最終到達圧力 0.1 ~ 760 Torr (即ち、13~101,080 Pa) である。特に溶融反応では、反応温度 260 ~ 380 °C、好ましくは 300 ~ 360 °C、最終到達圧力 1 ~ 100 Torr (即ち、133 ~ 13,300 Pa)、好ましくは 1 ~ 50 Torr (即ち、133 ~ 6,670 Pa) である。

【0029】

溶融重合は、反応系内が所定温度に達した後、減圧を開始して所定の減圧度にして行う。攪拌機のトルクが所定値に達した後、不活性ガスを導入し、減圧状態から常圧を経て、所定の加圧状態にして反応系からポリマーを排出する。

【0030】

溶融時に光学的異方性を示す液晶性ポリマーであることは、本発明において熱

安定性と易加工性を併せ持つ上で不可欠な要素である。上記構成単位からなる全芳香族ポリエステルアミドは、構成成分およびポリマー中のシーケンス分布によっては、異方性溶融相を形成しないものも存在するが、本発明に係わるポリマーは溶融時に光学的異方性を示す全芳香族ポリエステルアミドに限られる。

【0031】

溶融異方性の性質は直交偏光子を利用した慣用の偏光検査方法により確認することができる。より具体的には溶融異方性の確認はオリンパス社製偏光顕微鏡を使用しリンカム社製ホットステージにのせた試料を溶融し、窒素雰囲気下で150倍の倍率で観察することにより実施できる。上記ポリマーは光学的に異方性であり、直交偏光子間に挿入したとき光を透過させる。試料が光学的に異方性であると、例えば溶融静止液状態であっても偏光は透過する。

【0032】

本発明の加工性の指標としては液晶性及びガラス転移温度が考えられる。液晶性を示すか否かは溶融時の流動性に深く係わり、本願のポリエステルアミドは溶融状態で液晶性を示すことが不可欠である。

【0033】

一般的に、ネマチックな液晶性ポリマーは融点またはそれ以上の温度で液晶性を示し、各種成形加工が行われ、次いで結晶化温度以下にまで冷却されることで、成形品の形状が固化される。ところが、本発明の非晶性ポリエステルアミドは結晶化しないために、樹脂温がガラス転移温度付近に達するまで流動性が損なわれず、フィルム、シート、プロー成形等の押出加工に好適な材料と言える。そこで、成形品の耐熱性や、樹脂ペレットの乾燥工程の効率化等の観点から、ガラス転移温度は100 °C以上であることが好ましい。また、ガラス転移温度が180 °Cよりも高くなると、多層プロー等でのポリエステルアミドと他樹脂との接着性が悪くなり好ましくない。

【0034】

更に、ガラス転移温度より80~120 °C高い温度で、剪断速度 1000sec^{-1} における溶融粘度が $1 \times 10^6 \text{ Pa} \cdot \text{s}$ 以下であることが好ましい。更に好ましくは $1 \times 10^3 \text{ Pa} \cdot \text{s}$ 以下である。これらの溶融粘度は液晶性を具備することで概ね実現され

る。

【0035】

次に本発明のポリエステルアミドは使用目的に応じて各種の纖維状、粉粒状、板状の無機及び有機の充填剤を配合することができる。

【0036】

纖維状充填剤としてはガラス纖維、アスペスト纖維、シリカ纖維、シリカ・アルミナ纖維、アルミナ纖維、ジルコニア纖維、窒化硼素纖維、窒化珪素纖維、硼素纖維、チタン酸カリ纖維、ウォラストナイトの如き珪酸塩の纖維、硫酸マグネシウム纖維、ホウ酸アルミニウム纖維、更にステンレス、アルミニウム、チタン、銅、真鍮等の金属の纖維状物などの無機質纖維状物質が挙げられる。特に代表的な纖維状充填剤はガラス纖維である。尚、ポリアミド、フッ素樹脂、ポリエステル樹脂、アクリル樹脂などの高融点有機質纖維状物質も使用することが出来る。

【0037】

一方、粉粒状充填剤としてはカーボンブラック、黒鉛、シリカ、石英粉末、ガラスビーズ、ミルドガラスファイバー、ガラスバルーン、ガラス粉、硅酸カルシウム、硅酸アルミニウム、カオリン、クレー、硅藻土、ウォラストナイトの如き硅酸塩、酸化鉄、酸化チタン、酸化亜鉛、三酸化アンチモン、アルミナの如き金属の酸化物、炭酸カルシウム、炭酸マグネシウムの如き金属の炭酸塩、硫酸カルシウム、硫酸バリウムの如き金属の硫酸塩、その他フェライト、炭化珪素、窒化珪素、窒化硼素、各種金属粉末等が挙げられる。

【0038】

又、板状充填剤としてはマイカ、ガラスフレーク、タルク、各種の金属箔等が挙げられる。

【0039】

有機充填剤の例を示せば芳香族ポリエステル纖維、液晶性ポリマー纖維、芳香族ポリアミド、ポリイミド纖維等の耐熱性高強度合成纖維等である。

【0040】

これらの無機及び有機充填剤は一種又は二種以上併用することができる。纖維

状充填剤と粒状又は板状充填剤との併用は特に機械的強度と寸法精度、電気的性質等を兼備する上で好ましい組み合わせである。無機充填剤の配合量は、全芳香族ポリエステルアミド100重量部に対し、120重量部以下、好ましくは20~80重量部である。

【0041】

これらの充填剤の使用にあたっては必要ならば収束剤又は表面処理剤を使用することができる。

【0042】

また、本発明のポリエステルアミドには、本発明の企図する目的を損なわない範囲で他の熱可塑性樹脂を更に補助的に添加してもよい。

【0043】

この場合に使用する熱可塑性樹脂の例を示すと、ポリエチレン、ポリプロピレン等のポリオレイン、ポリエチレンテレフタレート、ポリブチレンテレフタレート等の芳香族ジカルボン酸とジオール等からなる芳香族ポリエステル、ポリアセタール（ホモ又はコポリマー）、ポリスチレン、ポリ塩化ビニル、ポリアミド、ポリカーボネート、ABS、ポリフェニレンオキシド、ポリフェニレンスルフィド、フッ素樹脂等を挙げることができる。またこれらの熱可塑性樹脂は2種以上混合して使用することができる。

【0044】

【発明の効果】

本発明で得られる特定の構成単位よりなる溶融時に異方性を示す全芳香族ポリエステルアミド及びその組成物は、溶融状態での粘度が高いため、プロー成形及び溶融延伸加工が容易であり、効率良く経済的に加工して液晶性ポリエステルアミドの優れた物性を保持したプロー成形品（特に燃料タンク等の自動車関連部品）、フィルムもしくはシートおよび繊維とすることが可能である。

【0045】

また、優れた延伸性を持ち、且つ異種ポリマーとの接着性に優れているという特徴から、他のポリマーとから形成される多層フィルムもしくは多層シート、他のポリマーとから形成される多層プロー成形品に特に好適に用いられる。ここで

使用される他のポリマーは特に制限されないが、ポリオレフィン、特に高密度ポリエチレンが好適である。

【0046】

【実施例】

以下に実施例をもって本発明を更に詳しく説明するが、本発明はこれらに限定されるものではない。尚、実施例中の物性測定の方法は以下の通りである。

[融点、ガラス転移温度]

パーキンエルマー社製DSCにて、20°C／分の昇温条件で測定した。

[溶融粘度]

温度250 °C、剪断速度 1000sec^{-1} の条件で、内径1mm、長さ20mmのオリフィスを用いて東洋精機製キャピログラフで測定した。

[溶融伸び]

内径1mm、長さ20mmのオリフィスを用いて、温度250 °C、剪断速度 36 sec^{-1} の条件でオリフィスから排出したポリマーが破断した時の引き取り速度 (m/min) を測定した。この値が延伸性の指標となる。

[接着強度]

三井化学製アドマーN F 5 1 8 の $100\ \mu\text{m}$ 厚シートを接着相手材として、200 °Cの温度で熱板溶着を行った後に、15mm幅の引き剥がし試験片を切り出し、最大引き剥がし強度を測定した。

実施例 1

攪拌機、還流カラム、モノマー投入口、窒素導入口、減圧／流出ラインを備えた重合容器に、以下の原料モノマー、金属触媒、アシル化剤を仕込み、窒素置換を開始した。

【0047】

- (A) 4-ヒドロキシ安息香酸59.22 g (20モル%)
- (B) 2-ヒドロキシ-6-ナフトエ酸161.38 g (40モル%)
- (C) p-アミノフェノール71.23 g (20モル%)
- (D) イソフタル酸64.81 g (20モル%)

酢酸カリウム触媒22.5mg

無水酢酸178.6 g

原料を仕込んだ後、反応系の温度を140 ℃に上げ、140 ℃で1時間反応させた。その後、更に330 ℃まで3.3時間かけて昇温し、そこから20分かけて10Torr（即ち1330Pa）まで減圧にして、酢酸、過剰の無水酢酸、その他の低沸分を留出させながら溶融重合を行った。搅拌トルクが所定の値に達した後、窒素を導入して減圧状態から常圧を経て加圧状態にして、重合容器の下部からポリマーを排出した。

【0048】

次いで、東洋精機製ラボプラスミルに幅100mmのTダイを取り付け、230 ℃の溶融ポリマーを30℃の冷却ロール上に押し出し、フィルム、シートの厚みが0.15mmになるように押し出し速度を調節してフィルム、シートを溶融成形した。

【0049】

この結果を表1に示す。

比較例1

原料モノマーの種類、仕込み量を以下の通りとした以外は、実施例1と同様にして重合を行った。この結果を表2に示す。

【0050】

- (A) 4-ヒドロキシ安息香酸82.69 g (30モル%)
- (B) 2-ヒドロキシ-6-ナフトエ酸112.65 g (30モル%)
- (D) イソフタル酸66.3 g (20モル%)
- 4, 4' -ビフェノール74.31 g (20モル%)

酢酸カリウム触媒22.5mg

無水酢酸178.6 g

実施例2～10、比較例2～6

原料モノマーの種類、仕込み量を表1～2に示す通りとした以外は、実施例1と同様にして重合を行った。これらの結果を表1～2に示す。尚、比較例3、4については、融点が高く、上述の実施条件では溶融粘度等を測定できなかった。

【0051】

【表1】

	実施例									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
HBA (モル%)	20	40	40	30	26	34	20	40	40	40
HNA (モル%)	40	20	40	30	34	26	20	30	30	30
TA (モル%)									7.5	5
IA (モル%)	20	20	10	20	20	20	30	15	7.5	10
BP (モル%)										
APP (モル%)	20	20	10	20	20	20	30	15	15	15
屈曲性モーメント(モル%)	20	20	10	20	20	20	30	15	7.5	10
HBA/HNA比率	0.50	2.00	1.00	1.00	0.76	1.31	1.00	1.33	1.33	1.33
ガラス転移温度(℃)	150.6	145.8	125.3	152.2	148.4	150.9	171.5	136.4	131.2	129.0
融点(℃)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
溶融粘度(Pa·s)	321.3	300.5	244.9	331.7	329.8	311.9	501.9	173.1	316.6	203.4
溶融伸び(m/min)	38.0	33.1	27.4	32.8	42.8	31.2	34.5	66.6	30.5	56.4
接着強度(N/mm)	0.99	1.24	0.75	1.10	1.02	1.24	0.85	0.77	0.35	0.32

【0052】

【表2】

	比 較 例					
	1	2	3	4	5	6
HBA (モル%)	30	30	35	60	10	40
HNA (モル%)	30	30	35	10	10	30
TA (モル%)			15			10
IA (モル%)	20	20		15	40	5
BP (モル%)	20	15				
APAP (モル%)		5	15	15	40	15
屈曲性モノマー量 (モル%)	20	20	0	15	40	5
HBA/HNA比率	1.00	1.00	1.00	6.00	1.00	1.33
ガラス転移温度 (℃)	129.4	135.8	128.8	138.0		133.5
融点 (℃)	—	—	246.7	253.0		—
溶融粘度 (Pa·s)	36.1	144.2				188.9
溶融伸び (m/min)	46.3	68.9				24.5
接着強度 (N/mm)	0.24	0.18				0.25

【0053】

HBA；4-ヒドロキシ安息香酸

HNA；2-ヒドロキシ-6-ナフト酸

TA；テレフタル酸

IA；イソフタル酸

BP；4, 4' -ビフェノール

APAP；p-アミノフェノール

【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 優れた延伸性を持ち、且つ異種ポリマーとの接着性に優れていることから、多層フィルム、多層プロー成形品等に好適に用いられる非晶質全芳香族ポリエステルアミドを提供する。

【解決手段】 (A) 4-ヒドロキシ安息香酸、(B) 2-ヒドロキシー6-ナフトエ酸、(C) 芳香族アミノフェノール、(D) 芳香族ジカルボン酸を共重合させて得られる全芳香族ポリエステルアミドであって、

- (1) (C) 芳香族アミノフェノールの割合が \leq 7~35モル%、
- (2) 原料モノマー中の屈曲性モノマーの割合が7~35モル%、
- (3) (A) 4-ヒドロキシ安息香酸と(B) 2-ヒドロキシー6-ナフトエ酸との比率 ((A) / (B)) が0.15~4.0 であり、
- (4) 20°C/min の昇温速度によるDSC測定で融点が観測されず、
- (5) ガラス転移温度が100 ~180 °C

である非晶質全芳香族ポリエステルアミド。

【選択図】 なし

特願 2002-305712

出願人履歴情報

識別番号 [390006323]

1. 変更年月日 1990年10月22日

[変更理由] 新規登録

住 所 東京都千代田区霞が関三丁目2番5号
氏 名 ポリプラスチックス株式会社

2. 変更年月日 2002年 1月18日

[変更理由] 住所変更

住 所 東京都千代田区霞が関三丁目2番5号
氏 名 ポリプラスチックス株式会社

**This Page is Inserted by IFW Indexing and Scanning
Operations and is not part of the Official Record**

BEST AVAILABLE IMAGES

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images include but are not limited to the items checked:

- BLACK BORDERS**
- IMAGE CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES**
- FADED TEXT OR DRAWING**
- BLURRED OR ILLEGIBLE TEXT OR DRAWING**
- SKEWED/SLANTED IMAGES**
- COLOR OR BLACK AND WHITE PHOTOGRAPHS**
- GRAY SCALE DOCUMENTS**
- LINES OR MARKS ON ORIGINAL DOCUMENT**
- REFERENCE(S) OR EXHIBIT(S) SUBMITTED ARE POOR QUALITY**
- OTHER:** _____

IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.

As rescanning these documents will not correct the image problems checked, please do not report these problems to the IFW Image Problem Mailbox.